沖縄再発見 －Rediscovery Okinawa－

「本土化」を目指して駆け抜けた50年を経て、
独自の歴史や文化に裏打ちされた、唯一無二の「沖縄化」を目指す。

□講師　作家
池上 永一 氏　EIICHI IKEGAMI

□Profile　1970年生まれ、沖縄県石垣市出身。94年、早稲田大学在学中に『バガージマヌパナス わが島のはなし』で第6回日本ファンタジーノベル大賞を受賞。98年には『風車祭』が直木賞候補に。2008年刊行の『テンペスト』はベストセラーとなり、舞台や連続テレビドラマ、映画にもなった。2017年『ヒストリア』は山田風太郎賞、J-WAVE BOOK BAR大賞、沖縄タイムス芸術選賞・文学部門大賞の三冠を達成。沖縄の伝承と現代が融合した豊かな物語世界を確立し、圧倒的なスケールのエンタメ作品を次々と発表している。

1972年の本土復帰を機に、急激に変化した沖縄

私は1970年に那覇で生まれ、3歳のときに石垣島に引っ越しました。私が子供時代を過ごした70年代の沖縄は、現在、皆さんが知っている沖縄とは別物です。まだ水族館もリゾートホテルもなく、観光コースと言えば「ひめゆりの塔」に代表される南部の戦跡巡りくらい。特に離島である石垣島はインフラ整備が遅れていて、自動車道こそあったものの、まだ荷馬車が走っていました。電気は通っていたので、テレビで『電話』の存在を知ったものの、家庭には浸透しておらず、「我が家にも電話が欲しいと」親にねだった際に「電話を持つには免許が必要」と言われたのを信じ込んでいたほどです。

1972年に沖縄が本土復帰を果たすと、目まぐるしく社会が変わっていきました。特に80年代に入ると、バブル景気を背景にリゾート開発が加速し、「本土に追いつけ、追い越せ」とばかりに、通常なら10年、20年かかる変化を2～3年で実現するほどでした。

石垣島にも信号機が整備され、子供たちはもちろん大人たちも「赤信号は止まれ、青信号は進め」と交通ルールを習ったのですが、左ハンドル、右側通行だった時代に整備された道路のため、よく自動車事故が起こっていました。この頃には、ようやく我が家にも電話が導入されましたが、加入者の急増に伴って、市外局番の桁数がどんどん増えていったことを覚えています。

沖縄への誇りなき「本土化」の歩み

社会全体がざわめいているような空気感の中、「本土化」という掛け声は聞

こえてくるものの、私は「ここも日本の一部」という実感を得ることができませんでした。

その理由の1つは、やはり離島という環境にあります。那覇とは違って石垣島では民放テレビが映らず、見たい映画も観られない、読みたい本も読めない。「この境遇の差は何だろう」という想いが強く、子供ながらに社会の端っこにいるという気持ちを抱えて育ちました。

こうした気持ちは、自身の成長や地域の発展とともに解消されるどころか、むしろ深刻になっていきます。80年代のリゾート開発によって生み出されたのは、消費されるだけの人工的なものばかりで、歴史や伝統、文化に裏打ちされたものではありませんでした。当時、高校生だった私は「沖縄には歴史や文化がないから仕方ない」などと思っており、ウチナーンチュ（沖縄人）であることに誇りを持つどころか「何で沖縄に生まれたんだろう」とコンプレックスを抱いていました。

そんな私を勇気づけてくれたのが、80年代後半から地元の出版社を中心に起こった「沖縄再発見ブーム」でした。米軍が残した薬莢を風鈴にしたり、ガスマスクの口金を仏壇のお茶請けにしたりと、本来の用途からかけ離れたキッチュな趣向を楽しむもので、今も「沖縄ポップカルチャー」として受け継がれています。いわば路上観察学のようなものではありますが、文化がないと思っていた沖縄からでも新しい文化が生まれてくることに、大きな可能性を感じたのです。

小説に書くことで初めて気付いた沖縄の価値

その後、大学進学のために上京した私ですが、憧れていたはずの都会に馴染むことができませんでした。なぜだろうかと考えたところ、離島育ちゆえに、サブカルチャーを楽しむうえで必要な「文化体験」や「消費行動」とは無縁だったためだと気付きました。映画や漫画、ポップミュージックなどのサブカルチャーというものは、子供の頃から親しんでいないと楽しみ方がわからないもの。周囲の若者たちは、時間をつぶすために何気なく映画館に行ったりしていましたが、私は事前に面白いかどうか調べてからでないと観に行けず、気軽に都会生活を満喫することができなかったのです。

せっかく東京にはモノが揃っているのに、うまく消費できないことに苦しみ、絶望感を抱いていたところ、ふと小説を書いてみようと思い立ちました。村上春樹の小説のような、都会的な若者たちの生きざまを書こうとペンを執ったものの、気が付けば、書いていたのは自分が子供の頃に体験してきた土俗的な世界。それはまさに、自分が否定していた沖縄でした。それがデビュー作『バガージマヌパナス』です。

そのラストシーンで、私は沖縄の海のあまりの美しさに、小説の中のこととはいえ涙を流していました。子供の頃から毎日のように見ていた沖縄の海。それがエメラルド色に輝いているのは知っていたものの、その美しさが心に届いていなかったのです。これまで自分がつまらない、価値がないと見過ごしてきたものの中に、これほど美しいものがある。そのことにショックを受け、「自分の中の沖縄を取り戻さなければ」と強く思いました。そうでないと、ウチナーンチュとしてふるまえない中途半端な人間になってしまうと感じたのです。

この体験によって、書くこと、文字にすることによって、はじめて物事が腑に落ちていく性分だとわかりました。これが私の作家としての第一歩と言えます。

1992年の首里城復元が時代の転換点に

私が沖縄に対する誇りを取り戻す大きなきっかけとなったのが、1992年の首里城復元でした。それまで、沖縄は文化のない田舎で、世間から「第一級品」と認められるものなど皆無だと思っていましたが、復元された首里城を見て、それが目の前にあることを知り、肝がつぶれるほどの感動を覚えました。

焼き物（やちむん）や紅型（びんがた）、漆工芸、螺鈿細工、彫金細工など、沖縄には独自の伝統文化が数多く残されています。それらはいずれも沖縄の人々が首里城に住む王家に納めるために創り上げたもの。首里城の復元を機に、私は沖縄を彩る文化の背景に王家の存在があったことをはっきり意識すると同時に、これを機に沖縄文化が復活することを期待したのです。

こうした想いは決して私だけのものでなく、72年前後に生まれた復帰世代に共通するものでしょう。首里城の復元は、その前後で時代が変わるほど革命的なもので、私たち復帰世代からすると、92年以降に生まれた方々は沖縄に対するコンプレックスがなく、「沖縄

は素晴らしい」と天真爛漫に言い切れるところが羨ましいほどです。

世代が変わっていくと同時に、沖縄社会の掲げるテーマも変化していきました。復帰世代が掲げた「本土化」というフレーズは、単に日本という国の一部になるというだけでなく、都市化を進めて東京に近づくこと、「東京化」を意味していました。ところが、実際にでき上がったのは単なる地方都市でしかありませんでした。「こんな姿を見たいわけではなかった」との想いを抱いていたウチナーンチュたちは、首里城の復元を機に、沖縄にも独自の文化があり、東京とも他の地方都市とも違う、唯一無二の存在になり得ることに気付き、「沖縄化」という新たなテーマが立ち上がってきたのです。

代表作『テンペスト』が描いた首里城の息吹

首里城は、作家としての私にも飛躍のきっかけを与えてくれました。デビュー作以降、沖縄を舞台とした小説を書き続け、表層的なものから始まり、次第に沖縄文化の深層まで表現しつつありましたが、さらにその先に進むのは容易ではありませでした。首里城を舞台にした小説を書きたい気持ちはあったものの、その歴史的背景の大きさに圧倒され、尻込みしていたのです。

そんな私が一歩踏み出せたのは、首里城正殿の屋根に避雷針が建っているのを見て、「これって現代建築じゃないか」と感じたときでした。私が首里城を小説に書きたいと思ったのは、ウチナーンチュに沖縄を肯定的に捉えるきっかけにしてもらいたいと思ったため。「現代人に読んでもらいたいのだから、現代人の感覚で書けばいいんだ」と納得がいったのです。

富士通らしくコンピュータに例えると、「富岳」のように巨大なハードウェアを前にして、それに見合うソフトウェアを開発する自信が持てなかったわけですが、改めて見つめてみると、首里城は優れたハードではあるものの、ソフトが欠けていることに気付きました。文化財としてはもちろん、観光施設や体験型学習施設として完成されているものの、あくまで来場者に見せるためのものであり、そこに住み、生きていた人々の息吹は聞こえてこない。それが悲しいことに感じられ、小説に書きたいと思ったのです。

19世紀の首里城を舞台にした『テンペスト』を書きながら、私は再び文字にすることで腑に落ちる感覚を得ました。日々の生活を通して、工芸品や舞踊、料理などの沖縄文化を見知ってはいたものの、それらはパズルのピースのようなもので、全体としてどんな絵を描いているかは見えていませんでした。『テンペスト』を書きながら、それらが組み合わさった絵の大きさや素晴らしさが見えるとともに、それらが首里城という文化の中心地から生まれ出てきたことがわかってきました。そのとき、私の中の復帰が終わったと、心から実感できたのです。

焼失から甦った首里城にふさわしい物語を

首里城は、私にとってウチナーンチュとしての自分を肯定してくれる場所で、誰に会うためでもなく、ただ首里城を観るために帰省することもありました。それほど心の拠り所にしていただけに、2019年に首里城が焼失したときの衝撃は、言葉にできないものがありました。

第一報に触れたとき、大げさでなく「自分が死んだ」と感じ、まるで幽霊になったような気持ちでした。テレビのニュースで、多くの方々が涙しているのを見て、その気持ちが痛いほどわかりました。中には「あれは復元されたものだから本物じゃない」という人もいましたが、そうではありません。私たちは、それまでの「本土化」とは違う、「沖縄化」という新たなテーマに取り組むための中心を失った喪失感に襲われ、途方に暮れていたのです。

その後、首里城再興に向けた動きが広がり、私も共感し、寄付もしましたが、心の奥底には「何かもっとできることがあるんじゃないか」との想いがありました。昨年くらいから、もう1度、首里城を舞台にした小説を書きたい、それが私の作家としての使命だと感じるようになりました。

再建されつつある新しい首里城にふさわしいソフトウェアをプレゼントしたい。それが今、私がこの場に立って、皆様にお約束したいことです。私は必ず、新しい首里城の物語を生み出します。沖縄は「本土化」ではなく、「沖縄化」していく。そのための核となる文化は、私たちウチナーンチュが自らの手で生み出せるものだということを、強く訴えたいと思います。